

論文審査の要旨	
筆頭著者（学位申請者）氏名	山田 悠史
主論文の題目 および 掲載・審査委員	題 目 Trends, Predictors, and Potential Disparities of Palliative Care Utilization among Older Adults with Hip Fractures: A Retrospective Analysis of the National Inpatient Sample, 2016-2020 （高齢者の股関節骨折における緩和ケア利用の傾向、予測因子、および潜在的な格差：2016-2020 年の全米入院患者サンプルの後ろ向き解析）
	掲載誌 Journal of Palliative Care 2024(in press)
	主査 橋口 さおり 副査 井上 莊一郎 副査 山本 豪明
[論文の要旨・価値]高齢者の股関節骨折は罹患率が高く、術後合併症のリスクや致死率が高い。近年、緩和ケアの介入は患者の QOL 向上に有効で、外傷後早期からの介入により、入院期間の短縮などに関連することが報告されているが、股関節骨折での緩和ケア利用の傾向についての報告は少ない。そこで全米入院患者サンプル（National Inpatient Sample; NIS）を用いて、股関節骨折患者における緩和ケア利用の傾向を明らかにし、関連要因を解析した。[方法]NIS に登録された年間延べ 700 万人の入院データから、65 歳以上の股関節骨折患者を対象とし、ICD-10 コードから緩和ケアチーム（以下 PCT）を利用した患者を特定し、多変量ロジスティック回帰分析により、生物学的要因、臨床的要因、病院特性を調整したうえで、緩和ケア利用の予測因子を評価した。[結果]約 29 万件の股関節骨折入院のうち、9546 件（3.2%）で PCT が利用され、観察期間中、増加傾向であった。PCT 利用群・非利用群ともに在院期間は 5 日で、総入院費用は 6 万ドル程度であった。院内死亡率は PCT 利用群で 21.8%、非利用群で 1.2%であった。PCT 利用に関連する因子は、人種（黒人:OR=0.73）、所得（低所得：OR=0.81）、病院の規模（小規模病院:OR=0.84）、地域（地方:OR=0.63）であった。[考察]股関節骨折では受傷後 6 か月以内の致死率が 18%にも及ぶが、PCT の利用は少なかった。障壁として、医療資源への不平等なアクセス、臨床判断時の医療者の偏見、終末期ケアへの文化的思考の違いなどが考えられた。改善のためには緩和ケアの有効性について医療従事者への啓発プログラム、マイノリティに対する緩和ケア認知度を高めるための啓発プログラム、地域特性からは遠隔医療の積極的な導入が考えられた。[結論]高齢股関節骨折患者における緩和ケア利用は少なく、人種や所得、病院の規模などの要因で格差がある。緩和ケアへのアクセスを改善し、医療資源の公平な配分を実現するための介入策や政策が必要である。	
[審査概要] 審査は主査と副査 2 名によって行われた。プレゼンテーションは視覚的にもわかりやすく工夫されていた。質疑応答では、まず緩和ケアについて詳細な説明を求めた。米国の緩和ケアは終末期だけに限らず提供され、内容としては症状緩和に加え、治療選択の説明に立ち合い、患者の意思を尊重した意思決定支援、術後の療養先での QOL 向上のためのケア計画の策定など、疾患を問わず積極的な介入が行われるとのことであった。高齢の股関節骨折患者の多くは術後元通りに回復しないことから、さらに緩和ケア介入の必要がある領域と考えられるが、今回得られたデータを基に、医療者や市民への啓発、DX を含めた今後の医療の展開、アウトリーチの強化など、高齢化が進むこれからの医療体制の整備につながるものであることが説明された。	
最終試験結果の要旨	
[研究能力・専門的学識・外国語（英語）試験等の評価] 申請者は関連する領域に関して幅広い知識を有し、研究を遂行する能力があると判断された。発表、質疑応答を通じて真摯な態度で臨んでおり、学位授与に値する人物と判断した。英語は引用文献に用いたものを提示し、指定した箇所をその場で読み、訳すことで評価し、十分な読解力があると判断した。この成果を基に緩和ケアの提供を推進する計画や、さらに詳細を検討する研究計画も立てられており、今後のこの領域の発展が期待できる。よって申請者の山田悠史氏は学位授与に相応しいと判断する。	